

研究室紹介

医学部 法医学教室

高田 綾

法医学は、便宜上、基礎医学系に分類されていますが、じっさいは実践的な応用医学であり、医学を始めとする科学的手法を駆使して、法的社会的問題を解決することがその存在意義です。同じ社会医学といっても公衆衛生や衛生学ともあまり接点がありません。異状死体の死因究明を中心として、中毒や個人識別、免疫遺伝学など広い守備範囲を有する「死後の臨床医学」で、問題解決のための应用能力、思考過程こそが、法医学の真骨頂といえましょう。

埼玉医大の法医学は、基礎医学棟6階に研究室、地下1階に解剖室があります。開講以来40年、ひっそりと、しかし着実に、法医解剖を業務の中心として活動してきました(司法解剖だけで約3500例、他に行政解剖など数百例)。解剖自体は短い例で2、3時間、長い例でも6、7時間程度ですが、その後の検査や書類作成に多くの時間と労力を要し、さらには遺族や警察、検察官などとの対応も必要になります。スタッフ一丸となって、毎日のように持ち込まれる解剖や鑑定に取り組んでいます。解剖鑑定業務を通じて埼玉医大の社会貢献の一翼を担う、これこそが法医学教室の最大の使命だと考えています。

現在の専任スタッフは、高田綾(教授)、原正昭(講師)、米山克美(助手)、および新井正明、富山紀子(実験助手)ですが、齋藤一之(前教授、現客員教授)、中西宏明(客員講師)も準常勤スタッフとして教育・鑑定・研究の一翼を担っています。高田が入局した平成4年当時は医師4名、non-MD4名で年間約60例の解剖数でしたが、現在はこのスタッフで200例の鑑定をこなさなければなりません。

法医学はapplied medicineであり、その研究は鑑定を出発点として、実務に還元されうる内容であることが特徴です。当教室は解剖鑑定が中心ですが、実務に直結した研究も少しずつ行ってきました。突然死の法病理学とDNA多型の鑑定実務への応用が主なテーマです。

たとえば、突然死の重要な原因疾患である心筋梗塞後心破裂の症例(150例以上)を解析し、梗塞発生後数日を経た破裂においても、梗塞心筋の吸収に伴う脆弱性が破裂の

原因ではなく、責任冠動脈に「新たな」血栓形成が生じたことによる「新たな」心筋虚血が破裂の誘因となっていることなどを明らかにしました。

睡眠時無呼吸症候群と突然死との関係にも早くから注目し、現在では、睡眠中の突然死と冠動脈攣縮の関係や、冠攣縮発作をひきおこす好酸球性冠動脈周囲炎(日本の病理学者・梶原弘毅先生が発見、われわれは「梶原病」と呼ぶ)の病変分布などを解析しています。

クモ膜下出血の原因となる脳動脈解離や脳動脈瘤の発生病理にも興味を持っています。脳ドックなどで未破裂の動脈瘤や動脈解離が発見された場合、手術をすべきか否かは臨床的に重要なテーマですが、病理学的知見からその判断材料を提供できないかと考えています。クモ膜下出血では外傷性脳動脈損傷の病理学的鑑別も重要な課題です。

また、当教室では20年以上にわたり、多くの乳児急死例を診断してきました。おそらく全国的にも症例数が最も多い施設のひとつかと思われます。そのような経験をベースに、厚労省の「乳幼児突然死症候群(SIDS)の診断基準」策定に参加しました。現在わが国で行われている「乳幼児突然死の分類」や「SIDS診断の手引き」の原案は、当教室が作成したものです。

SIDSは、発症数こそ減少(この20年で5-6分の1)したものの、いまだにその本態は不明です。愛する赤ちゃんを突然失って悲しい思いをされている家族はいまなお後を絶ちません。ネグレクトなどの虐待や、先天性代謝異常症との鑑別にも多くの課題があります。なんとかその病態解明と予防に貢献できるよう、研究を進めています。

さらに、DNA多型の個人識別への応用も研究室の重要なテーマのひとつです。主に鑑識実務に直結するような鑑定手法の開発を中心に研究を行っています。

以上のように、法医学の研究は臨床医学に近いことをご理解頂けたでしょうか。法医学は犯罪死体の鑑定を通して治安維持に貢献しているだけではないのです。突然死例などの解剖を通して得られた知見を医療、医学に還元す

ることで、避けられる死を予防し、生きた人の健康な生活に役立てることも可能となります。研究テーマはたくさんあるのですが、いかんせん人手不足で手つかずになっているのが残念です。

昔から法医学者になる医学部卒業生は10年にひとりといわれてきましたが、全国的にみても若い法医学者は減少の一途です。臨床研修必修化は法医学にとって

マイナス要因でした。臨床から離れ、長く孤独な修練を必要とし、遺族対応などの社会性も求められるうえに、脚光を浴びることはなく、経済的にも恵まれない分野ですので、まあやむを得ないと思いますが、法医学の実務と研究に興味をもち、裏方に徹する使命感のある若者が一人でも出てくることを期待しつつ、筆を擱きたいと思います。